

ご 挨拶

国際関係学部の創立メンバーとして1988年に赴任されてから13年間、「資源論」の研究教育を通して国際関係学部教学に尽くされた唐沢教授が定年で退職されることとなりました。

現代国際社会の実相を分析し、そこから次の時代を構想する「問題解決型」の学問を開拓しようとする国際関係学部にとって、現代国際関係の重要な要素となっている「資源問題」は必須の科目であります。

唐沢先生が赴任前および赴任後に成し遂げられた研究上の数々の業績は、「主要著作目録」を一読しただけでもお分かりいただけると思いますが、先生の学問研究は、単なる書斎の中の研究にとどまらずに、現実動いている社会のあり方に対する鋭い分析と提言を伴っており、それは、1992年に第16回石油文化賞を受賞されたことにも現れています。

先生の担当科目は、当初は「資源論」と名づけられました。資源問題はエネルギー問題の重要な一部分となっており、大学院では「資源・エネルギー特講」を担当されました。しかし、1990年代にグローバリズムが進み、とくに環境問題の解決が世界的な課題となる趨勢の中で、先生は資源論と結びつけた新しい学問分野として「資源環境論」を開拓され、それが正式に学部の科目となりました。日本ではいまもってこの科目を設置している大学はほとんどありません。

個人的な研究教育活動の実績だけでなく、先生は、研究部が設置された翌年から2年間、研究部長として、立命館大学全体の研究とくに共同研究体制の発展のための基本方針を策定し、研究基盤の整備を進められました。その後は、2代目の国際地域研究所所長として3年間、プロジェクト研究を自ら進めるとともに、多くの共同研究のマネジメントに手腕を発揮されてきました。とくに、アメリカ・カナダ・韓国を始めとする世界の多数の諸大学・研究機関との国際共同研究で成果を挙げて、立命館大学の国際化を新しいレベルに引き上げたこと、また、国内の企業・シンクタンク等と共同研究を進めて、大学と社会の研究上の連携（リエゾン活動）強化を成し遂げられたこと、は本大学の歴史にとって特筆される変化でありました。

学部創立メンバーとして国際関係学部および大学院国際関係研究科の発展にご尽力下さり、また、立命館大学の研究発展に顕著な貢献をされましたことに、深く感謝いたします。

2001年3月

立命館大学
国際関係学部長

安藤次男